慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	テリアカ文献の採訪
Sub Title	In search of ancient literature pertaining to the almighty antidote, "Theriaka"
Author	宇野, 善康(Uno, Yoshiyasu)
Publisher	三田史学会
Publication year	1987
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.56, No.4 (1987. 2) ,p.119(533)- 123(537)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	資料紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19870200-0119

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

―資料紹介―

テリアカ文献の採訪

宇野善康

〔I〕

万能解毒薬「テリアカ」については、前嶋信次先生の「テリアカ考」、その他や医史学者や筆者らの種々の文献にくわしく論ぜられているので説明を省略したいが、今回、アラビア語の写本から訳出された「毒物とテリアカに関するシャーナークの書」に記述されているテリアカは、医史学者たちが伝統的に研究して来たものとは違うので注釈をつけておきたいと思う。この訳文の中に出てくるテリアカの中で、「ファールーク・テリアカ」のみが本来のテリアカの一種（これは数十種以上の薬種を用いて作られた王侯貴族用であり、貧乏人用のアムニ・テリアカは四種類の薬種のみによって作られた）であって、その他の薬は、テリアカという固有名詞を普遍的に一般化した形で、使われているのである。例へば、瀬戸地方で焼かれた陶器を『瀬戸物』と呼ぶが、現在では、多くの人が陶器一般を「瀬戸物」と呼んでいるのと同じである。欧米人が陶器のことを一般的に、原産国の名前をとって、「チャイナ」と呼ぶのと同じ呼称法である。

つぎに、稲葉政隆氏により訳出された写本「シャーナークの書」を見つけた経緯とそれをめぐって少々述べておきたいと思う。

一九七七年六月に筆者は、西ベルリンで開かれた世界コミュニケーション政策企画会議に招かれて出席したあと、ベルリン自由大学の図書館で、ノールウェイ語で書かれた「テリアカ」文献を見つけ、また、ハイデルベルグ城内の薬学博物館の最も奥の部屋で「テリアカ」の展示と説明を見、かつ「テリアカ」についてラテン語で書

かれた十四五世紀のファルマコペア（薬局方）を見てのち、空路によってエジプトのカイロに飛んだ。カイロ大学の医学・薬学部図書館でテリアカ文献を探すためであった。

「三菱商事」の大場智男氏（塾員）に紹介をいただいたカイロ大学薬学部出身のエジプト人、マダム・ファーテン女史（アラビア語↔英語通訳）に案内を願って、一九七七年六月十四日に右記の図書館を訪れた。いろいろな儀礼的手続きがあったため、今回、日本で訳出された写本原本のコピーを入手するのに連日、通って三日間を要した。

最初、筆者はファーテン女史に写本の英訳をして貰い、それを筆者が邦訳する計画で、コピー一部を彼女に渡し、念のためにもう一部を日本に持ち帰った。数ヶ月后、ファーテン女史は写本の英訳原稿を日本宛送ったそうであるが、筆者の手元には届かなかった。（ビール壜に貼るラベル用の紙も全く欠乏していたエジプトでは、手紙などが宛先に届いたら大変運がよかったと喜ぶということをあとで聞いた）。今日になって、稲葉氏により、写本のアラビア語原本から直接に日本語に訳出され、日本において陽の目をみることができるに到ったのである。

筆者は、カイロ滞在中、数ヶ所の薬局を廻ってテリアカを購入しようとしたが、カイロでは「テリアカ」とは薬一般のことをいうのであって、テリアカの中の何が必要かと聞き返された。薬局へ行って「薬を下さい」というのと同じであった。このことはカイロ大学の医学・薬学部図書館においても確認したことである。

また、前記の大場氏に案内していただいて、旧街区のハンハリリー街を見て廻り、テリアカを売っている店を見つけた。ここにあったのは、骨片のようなものと、枯木様のもので、腎臓に効くとか肝臓によいということで、本来の「テリアカ」の材料とは違っていたことを記しておきたい。

右記のカイロ大学図書館にある「テリアカ」記載の印刷物は、一八三七年版のパリ発行の「フランス・ファルマコペー」と、一八六一年版のライプチッヒとハイデルベルグ発行の「アルゲマイネ・ファルマコペ」および、カイロの政府印刷局発行の医学・生物学・諸科学の英語―アラビア語対訳の辞典であって、それぞれ本来のテリアカであるアンドロマコス・テリアカのことが記されている。

しかし、以下のファーマコペア（薬局方）には、テリアカの記載はなかった。（　）内は発行年。

1. Pharmacopéa Portugueza (1876), Pharmacopea Germanica(1985), 2. Pharmacopoea Heluetica edition française (1907, 33, 34), Pharmacopoea of Japan (1907), *ΦΑΡΜΑΚΟΠΟΙΪΑ ΕΛΛΗΝΙΚΗ ΕΝ ΑΘΗΝΑΙΣ* (1924), Farmacopea Mexicana(1925), Svenska Farmakopén (1925), Nederlandsche Pharmacopee (1926), Farmacopea Ditalia (1925, 65), 4. Farmacope oficial Espanóla (1930), Pharmacopée Belge (1930, Pharmacopaea Danica(1933, 48), ГОСУДАРСТВЕННАЯ ФАРМАКОПЕЯ (1934), 5. **The English Text of Egyptian Pharmacopoeia Cairo Fouad University Press(1953)**, Farmacopea National Argentina (1956), Farmacopéia Dos Estados Unidos do Brasil (1959)

〔Ⅱ〕

「毒物とテリアカに関するシャーナークの書」の著者、シャーナークが印度の偉人であったことから、筆者は、カイロ滞在の直後、印度のボンベイに飛んだ。

ボンベイ大学の図書館で、現代エジプトの著名な医史学者ガリオウンギイ博士（Dr. Paul Ghalioungui）の著書 "Magic and Medical Science in ancient Egypt London, Hodder and Stoughton 1963" をみつけた。（カイロ滞在中、筆者は前記の大場氏の案内をいただいて、ガリオウンギイ博士を尋ねたが、旅行中で不在であった）。この著書の参考文献は一八〇冊ほどであったが、テリアカの記載はなかった。

つぎに、Dictionary of Indian and Foreign Medico with Home Remedies をみると、家庭医薬の章にある解毒薬（Antidote）の項には、解毒のために Sugar を用いるアイデアと Honey を使用するとよいというアイデアが記載されており、毒の種類別にその使用法が説明してあった。これは、本来のテリアカの重要な主成分に糖蜜が使われているアイデアと似ている。そこで、印度古来の伝統的医学の大家を訪れることになった。

ボンベイ大学の Podar 病院の名誉教授（アーユルベーダ医学の大家）アンタルカール博士（D.S.ANTARKAR この系統の博士は Dr. と云わないで Vaidya という）にお会いし、テリアカについて説明し伺ったところ、アーユルベーダ医学は三千年の歴史を持っているので、ギリシャで創成されたというたかだか二千年程度の

歴史を持った新しい薬は使ってはいないと思うということで御存知なかった。しかし、もしも印度に入っていれば、後日、日本へ手紙で知らせましょうと云っていただいた。そして、厚さ十二糎ほどの印英対訳のアーユルベーダ医学大典を見せて貰ったとき、解毒剤の記載の各所に Sugar が用いられているので、その作用を尋ねたところ、Sugar が毒物とアマルガム（融合物又は混合物）を作って体外に排出されるからだとの説明があった。この説明は、このあと訪問したオールドデリーのタジュディン博士から聞いた内容と同じであった。

つぎに、ニューデリーに飛び、デリー大学を訪問して、テリアカについて尋ね廻ったが、誇り高き伝統的なインド医学の中で、テリアカについて御存知の方に会うことはできなかった。途方に暮れていると、滞在日程の最終日の朝、デリー大学の Dr. SAVITRI 助教授からホテルへ電話があり、昨日、老父に尋ねたところ、印度にもギリシャ系の医学の伝統があって、YAVANA（ギリシャ系医学の薬）を訛って、UNANI と呼んでいるが、これを作っている研究所がニューデリー市の Asaf Ali 通りにあって、これを HAMBDARD DAWAKHANA といっている。ここを尋ねてごらんなさい、と助言された。

そこで、デリー大学を卒業した Mr. Somnath Datta（印↔英通訳）に案内を乞い、右記の研究所 HAMBARD RESEARCH CLINIC & NURSING HOME を尋ね、そこの Superintendant である Dr. R. N. Gupta に来意を告げると、一階にいる老医ならば知っているかも知れないということで紹介された。一階の診察室へ行ってみると、まっ暗な部屋の中にローソク一本のみの明りで患者を診察している老医が居られ、まことに神秘的な異様な雰囲気であった。この先生は、オールドデリーの TUGHLAGABAD にある Institute of History of Medicine and Medical Research に行くがよいと云われ、二階の Dr. Gupta に右の研究所の所長宛に紹介状を書いてもらい、車で約一時間かかる TUGHLAGABAD に向った。この研究所の所長タジュディン博士（Director Col. Tajuddin）は、戦前から昨年まで、数回も日本を訪れて居られ、七十三歳の見るからに品のよい風貌の紳士であった。食事などの心配もされ大変歓待を受けた。テリアカについては御存知なかったので、その歴史をかいつまんで説明したところ、興味を持たれ、この研究所にある文献を一週間かけて調査させ、見つかれば、日本

宛に通知して下さるとのことであった。摂氏四〇度の猛暑の中をホテルに帰った。その後、一九八六年の今日にいたるまで、アンタール博士ならびにタジュデイン博士からの通知は届かないままである。

以上は、限られた旅程の中で行った不用意で成果の挙がらない文献採訪の模様であるが、今後の採訪において失敗例として参考になれば幸いに思う。

筆者の専門は『普及学』であって、筆者は、普及過程研究の一環として、本来の「テリアカ」の普及過程に関心を持って来た。したがって、今回、原著から直接、邦訳された「毒物とテリアカに関するシャーナークの書」についてはよく知らなかったが、日本に持ち帰った後、この文献が大変に貴重なものであることを識者から知らされた。

この書については、左記のようなB・シュトラウスによる独訳があること、とA・ミュラーによる研究があることを邦訳者の稲葉氏から聞いた。いづれ本書に関する文献上の位置づけ的研究や解題がされることを期待している。

B. Strauss : "Das Giftbuch des Šānāp. Eine literaturgeschichtlich Untersuchung" Quellen und Studien zur Geschichte der Naturwisrenschaften und der Medizin IV, 1935, pp. 89–152.
dozu 66 Seiten arabische text.

A. Müller : "Arabische Quellen zur indische Medizin." Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft 34, 1880, pp. 501～544.

尚、蛇足であるが、今回の文献採訪以外で興味あるテリアカ文献を見ることのできた主な図書館は、左記の通りであった。

パリの国立図書館、英国のオックスフォードのボードリアンおよびロー図書館、ラドクリフサイエンス図書館、伊国のベネチアのマルシアナ国立図書館、クエリニ・スタンポリア図書館、フィレンツェの国立中央図書館、ローマの国立中央図書館、米国のハーバード大学医学部図書館、

日本では、内閣文庫、静嘉堂文庫、研医会図書館、北里図書館、京都大学および日本大学医学部図書館、武田薬品工業開発部図書室である。